

平成26年度 夏季展



「末森図」(16.51-18)

末森の戦い

と加賀の山城

玉川図書館 近世史料館

はじめに

「末森の戦い」は岡本慶雲の著した「末森記(末守記)」でよく知られている戦いです。前田利家の名言とされる「人は一代、名は末代」の文言もこの「末森記」に記されています。

天正12年(1584)9月11日(10日説あり)、越中の佐々内蔵助成政が軍勢を率いて能登の末森城を攻め、末森城は守勢となります。一報を受けた前田利家は金沢を急発し海岸線を進み末森城に入り、成政軍を撃退した戦いのことで、利家が援軍として、末森城を攻める佐々軍の背後から参戦勝利した戦いで「末森後巻」や「末森後詰」とも称されていますが、その戦いは、天正12・13年の2年間にわたる利家と成政との争いの一部、利家の遺書における「内蔵助と取合」った戦いの一つでした。

加賀・能登の前田利家と越中の佐々成政の争いは、単なる隣接領主の争いではありません。天正10年(1582)本能寺の変後の織田信長後継争いが起こり、豊臣秀吉は翌11年賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を破りますが、天正12年4月には織田信雄・徳川家康と争う(「小牧・長久手の戦い」)ことになります。利家と成政は賤ヶ岳の戦いの後は秀吉に追従していましたが、成政は信雄・家康軍に呼応し、天正12年8月28日、加賀の朝日山城を攻めます。このことから利家の「内蔵助と取合」が始まりました。天正12年中は末森城・鳥越城など能登や加賀での争いでしたが、翌13年には利家が徐々に越中に攻め込むようになり、8月には秀吉が五万を越える軍勢で越中へ出陣、成政は降伏し新川一郡に減封され、利家には越中三郡を加封(前田利長へ)され、「羽柴筑前守」の称が譲られました。

今回の展示では、末森の戦いや加賀の山城など「内蔵助と取合」に関する当館所蔵史料を展示し、前田家が加賀・能登・越中三ヶ国の領主となった過程の一端を紹介します。



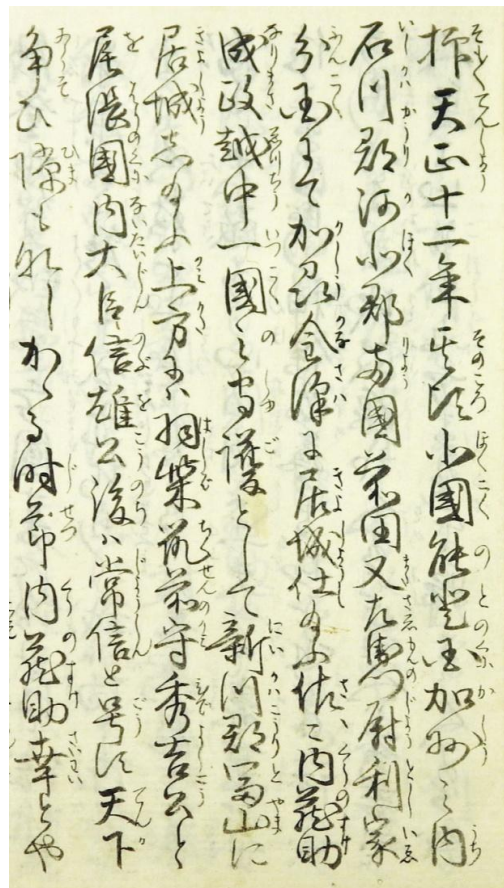
「加賀国古城跡之図」(16.84-136)

末森記(末守記)

「末森記」は岡本慶雲が著したもので、天正12年(1584)7月から13年9月までの利家と成政の争いの顛末が記されている。「末森城の戦い」についてはわずか2、3日間の戦いにも関わらず全体の約三分の一を占め、表題となるが、末森城における戦いの記述よりも前後の津幡城での軍議等の記述が多い。

諸写があり表現は異なるが、おおよそ「抑天正十二年、其頃北国…」から始まり「…目出度武将の行末かなと皆人申あへり」で終わる物語調の文体である。その後の9月15日付長見右衛門尉宛の奥書には、慶雲の略歴が記され、その奥書および「温故集録」巻11(16.28-71)によると、岡本慶雲は通称七之助、佐々成政の馬廻であったが、末森の戦い前に前田家の馬廻となり、慶長2年(1597)には前田家を離れ久世但馬を頼り越前織田に隠居している。なお、久世但馬は成政の重臣で、鳥越城を守り、成政の切腹(天正16年)まで仕え、後結城秀康に仕え越前に移っている。

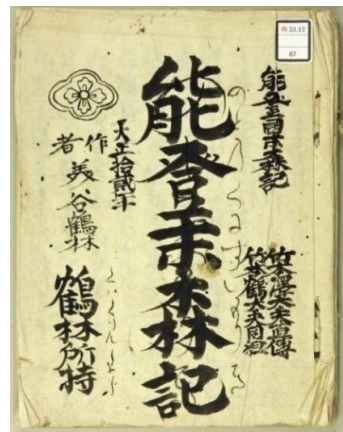
慶雲の「末森記」について、「愚、此書村井家ニテ編タルト云、仍家長コヲ要ト記」(16.51-7)との指摘もある。「愚」は今枝直方、「家長」は村井又兵衛長頼のことである。



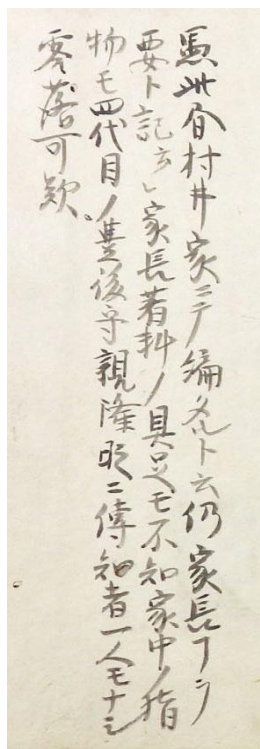
「末森記」(16.51-4)

岡本慶雲の「末森記」は「利家利長記」(「末森記」16.51-3)と題されたもの、底本にして後人が加筆・改編したもの(098.0-6)もある。

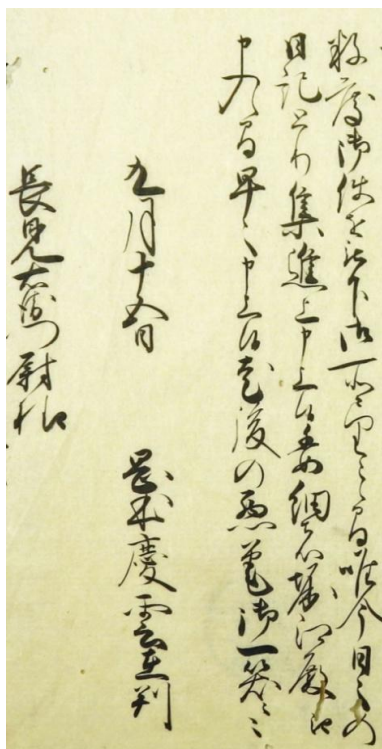
軍記物としてふりがな付のもの、また、浄瑠璃本の末森記では、「竹本沢大夫直伝」「作者美谷鶴林」とあるが内容は岡本慶雲の末森記である。



「末森記」(33.12-67)



「能州末森記」
(16.51-7)



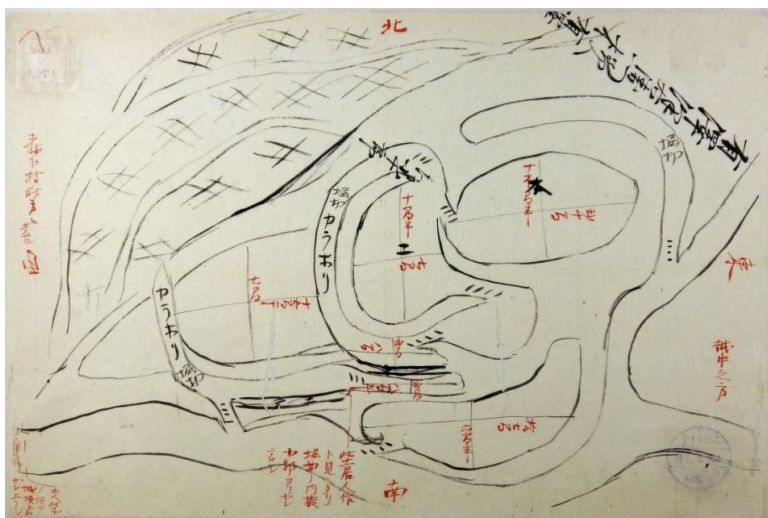
「末守記」(16.51-1)

朝日山城の戦い

末森記によると、成政は前田家を油断させるため天正12年7月、娘と利政(利家二男)との偽の縁組を持ち掛け、その策略が前田家に伝わると、利家は村井長頼らに加賀と越中の境目である朝日山に城を築かせた。8月28日、加賀を攻めるための適地を求めて来た成政方の佐々平左衛門・前野小兵衛軍が現れ戦闘となるが、佐々軍が引いて終わる。

このことを利家は成政の謀反と秀吉に伝えるが、秀吉は9月8日付利家宛書状(16.03-1「松雲公採集遺編類纂」144)に「聊卒爾なる働御無用」(拙速なことをするな)としている。

なお、成政方の佐々平左衛門は、成政の家老として一万石の知行で最期まで成政と共にしたが、その子孫は「石原」と改姓し、加賀藩の与力となっている(「先祖由緒井一類附帳」佐々才二郎)。



「加州河北郡五ヶ庄朝日山之城跡」(16.84-150①)

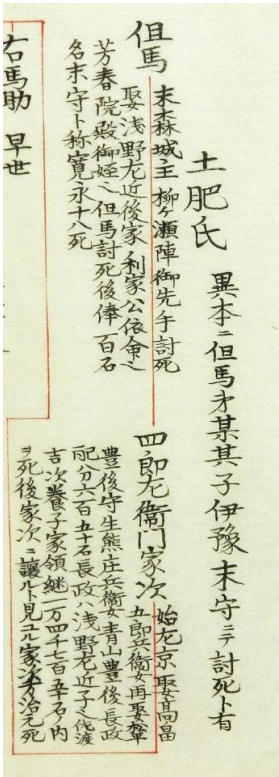
末森城の戦い

口能登の末森城は加賀と能登の境に位置する城であるが、また越中とも接する要衝の城であった。城主土肥但馬は天正11年柳ヶ瀬の戦いで亡くなり、利家は替わりに奥村助右衛門永福・千秋主殿助そして但馬の甥とされる土肥伊予を配した。

- 末森の戦いについての史料は多く、齟齬もあるが、その経過概要は以下の通りである。
- 天正12年9月6日成政軍は、富山城を発して末森攻めに向かう。佐々軍は、沢川村の田畑兵衛(前田方)に故意に難所に案内されながらも、宝達山を越え坪山(坪井山)に陣を取る。
 - 11日佐々軍は末森城下に攻めこむ。城下を守るため打って出た土肥伊予は討たれ、末森城は守勢となる。午後の2時頃には金沢城に知らせが入り、利家は即刻金沢を発ち、津幡城へ向かい、午後8時頃に着く。軍議を経て夜の内に津幡を発ち末森に向かう。川尻に陣取る佐々方の神保軍を避け、海岸沿いを進む。
 - 12日早朝に今浜に着き、末森城を攻める佐々軍の背後を突き、勝利する。12日午前の内に成政は軍を引き、空城であった鳥越城を押さえ越中へ戻り、利家は津幡城を経て夕方には金沢城に戻っている。

その後、10月には末森の戦いの功績として、奥村と千秋にそれぞれ千俵加増され、奥村には利家が末森の戦いの時着けていた甲冑・甲や、今浜の砂山に立てたとされる鍾馗の馬駿などが与えられている。また、12年中には鳥越城や俱利伽羅城辺りで佐々軍との争いが続いた。

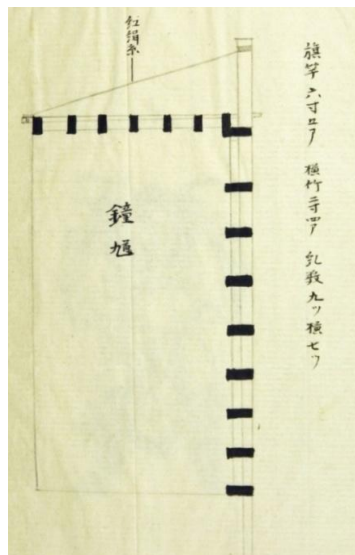
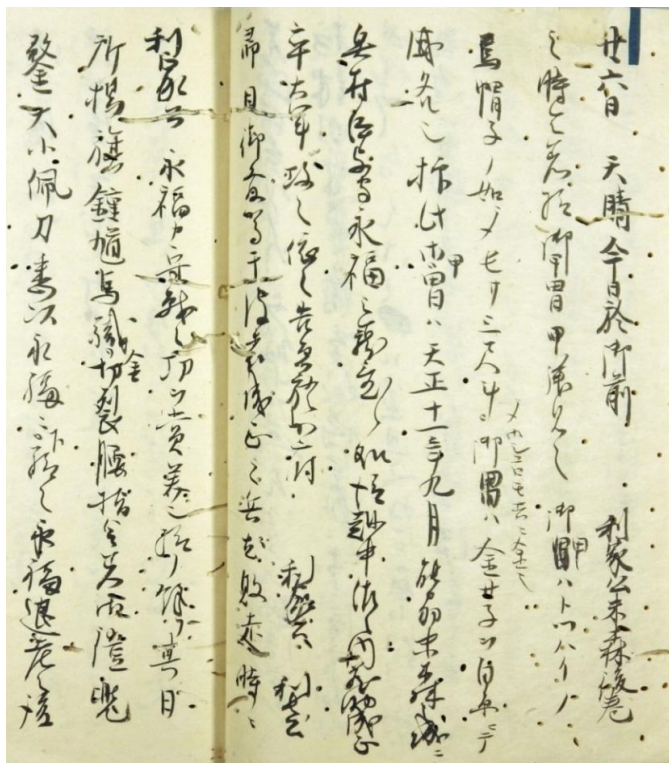
一方、豊臣秀吉は11月には織田信雄・徳川家康と講和を結び、小牧・長久手の戦いが終わった。信雄・家康に呼応して動いた成政はいわゆる「さらさら越え」を行い家康・信雄と会い、越中に戻る。秀吉と信雄・家康との講和にもかかわらず、利家と成政の争いは翌天正13年も続く。



「諸士系譜」(16.31-49)



「羽咋鹿島両郡組分絵図」(17.9-13)



鍾馗の馬駿と鍾馗の絵「奥村氏記録」1(16.31-80)

※鍾馗は疫病神を払い、魔を除くと信じられた神

天和2年(1682)8月26日

「葛巻昌興日記」15(16.40-75)

葛巻昌興は「於御前(5代藩主綱紀)、利家公末森後巻之時、令着給御甲冑・甲拝見之」と記している。それは利家が、奥村永福に末森の戦いの賞として与えたもので、鍾馗馬駿等も含まれていた。永福隠居後は二男易英に継がれ、後綱紀が加賀へ初入国の時、奥村家から前田家へ献上され今も前田家に遺る。

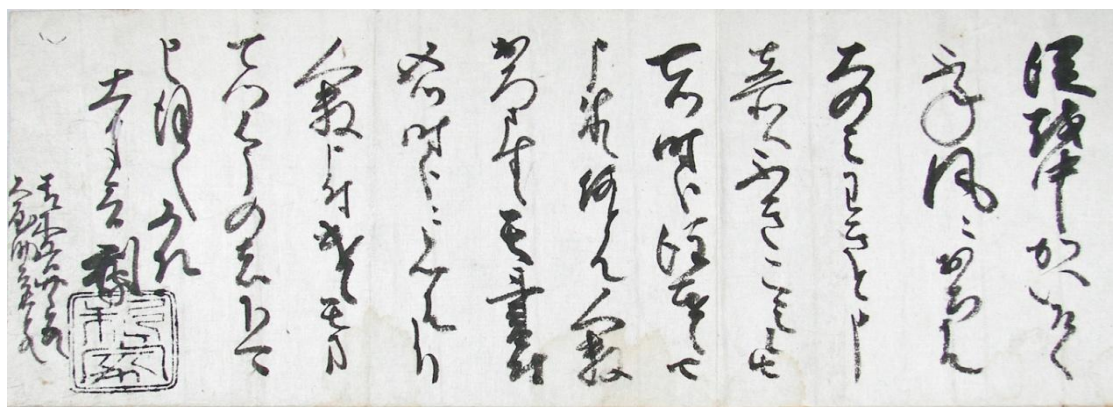
鍾馗馬駿については、末森城兵であった上原藤五郎は「堀上見之」、武田信玄が先祖隋応軒に与え家に伝来したものを利家に献上した旗である、としている。上原勘十郎の「先祖由緒并一類附帳」では「藤五郎」ではなく「清兵衛」とあり、祖父隋応軒・父能登ともに武田信玄に仕え、隋応軒は武者奉行を勤めた。清兵衛は武田勝頼没後加賀へ来て、奥村永福の取り次ぎで天正12年7月利家に30石で召し出されている。

なお、「奥村因幡守覚書」(「加能越古文叢」40 16.03-4)には「城中ニハ利家様とハ見付不申候」、利家軍が末森の城下で戦い始めたことで「大納言様と奉存候」と記している。

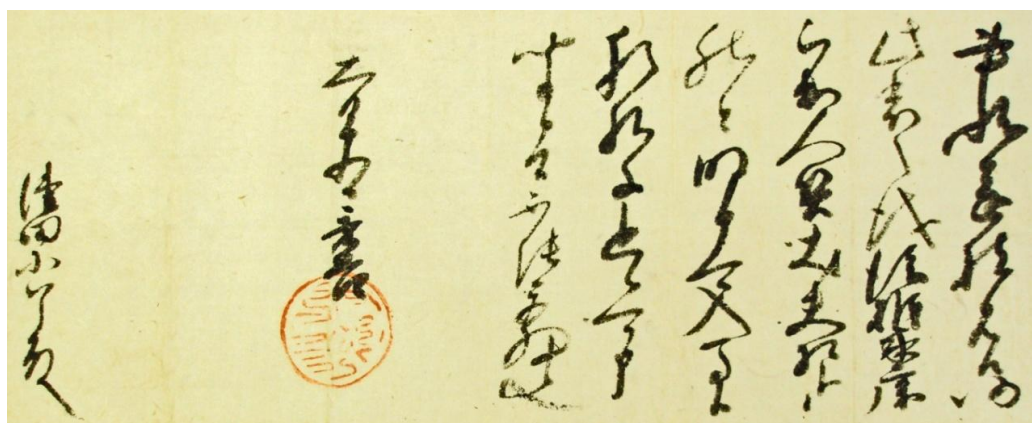


「菅君栄名記」1

(16.11-10)



「前田利家印物(越中海賊船につき)」(090-1286-2)

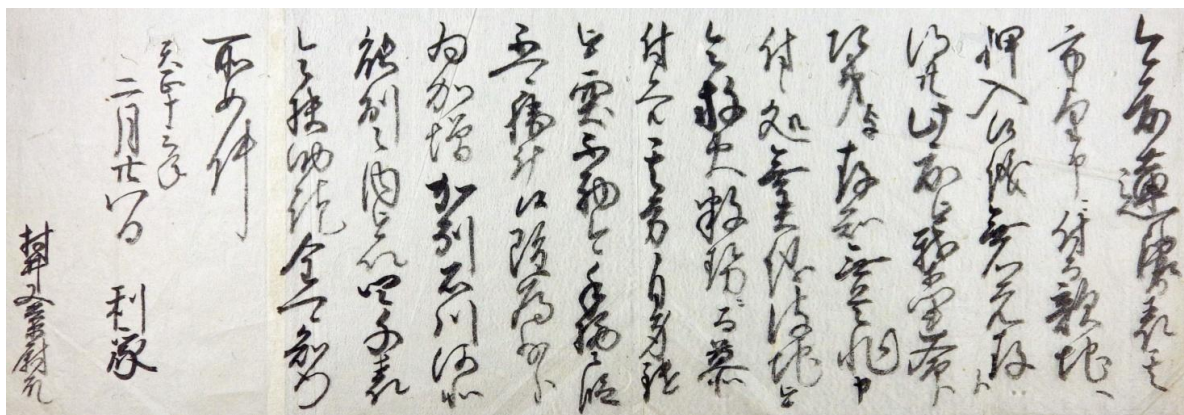


「豊臣秀吉朱印状(信雄・家康人質差出につき)」(090-1349-9)

利家印物・秀吉朱印状ともに天正12年11月の書状であろう。

越中海賊船は佐々軍の事で、石動山で能登を守る青木善四郎らに指示を出している。「大のミわき」(大呑・脇)は富山湾に面した村である。

秀吉朱印状は日付および「信雄家康被出人質」から小牧長久手の戦いの講和にともなう書状であろう。宛所の津田小八郎は秀吉の臣で、子孫右京は3代藩主利常の代から加賀藩に仕えている。



天正13年4月の越中蓮沼攻めを賞した加増である。
利家は村井に「敵地へ押入候儀」「我等運命次第与存知無是非申付」けたとしている。
この蓮沼攻めから越中へ攻め始めることになる。

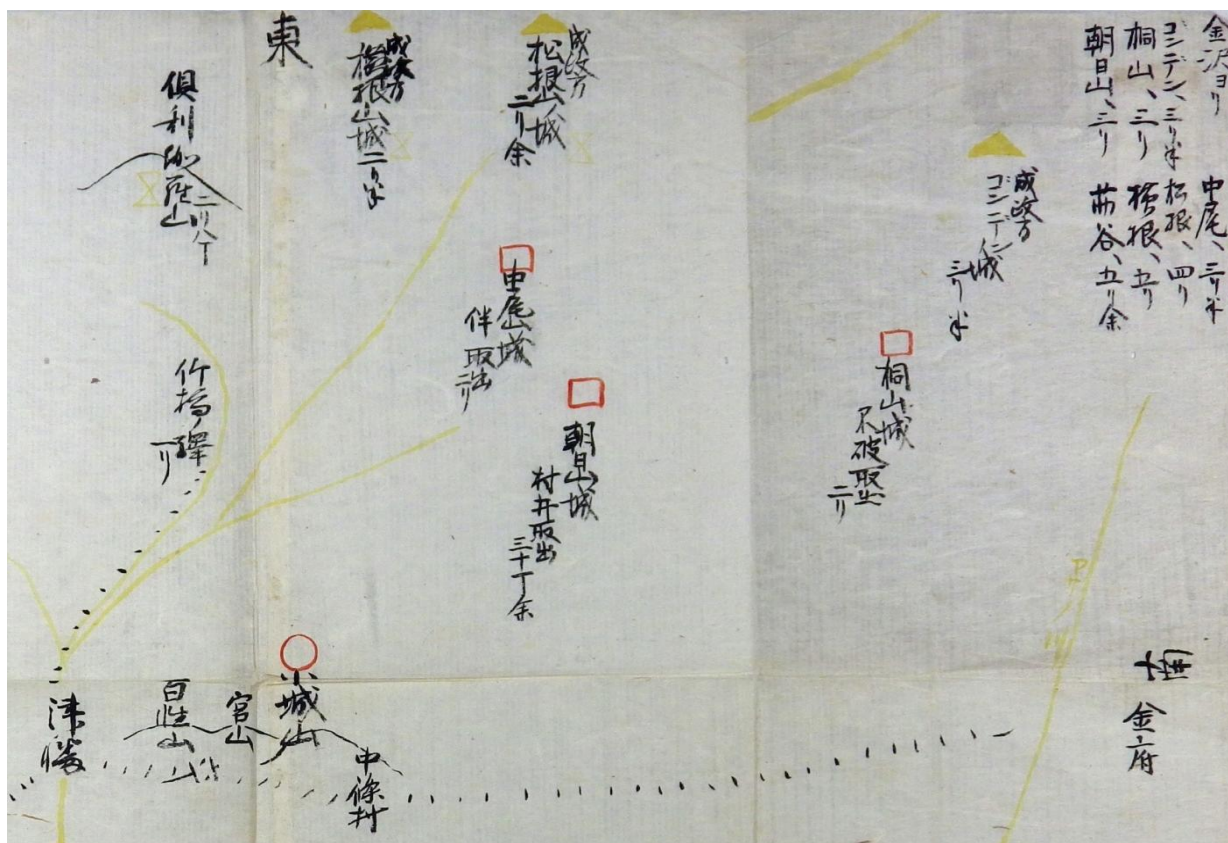
「村井又兵衛知行宛行状写」(16.30-2)

鳥越城 末森の戦い以前に対成政のため、利家は目賀田又右衛門・二羽源十郎を配したが、天正12年9月末森の戦いのとき成政軍を畏れ両将は城を空け逃げる。成政軍は末森から引く時に空城であった鳥越城を押さえ、久世但馬を置く。利家は10月に鳥越を攻めるが落とせず、翌13年4月に再び攻める。この戦いの時、横山長知は佐々軍の印牧二郎に鎚で脇下を突かれている。この印牧も後に加賀藩に仕えている(「山城守物語」温故集録巻1)。諸士系譜(印牧)では「仕佐々成政鳥越合戦、横山山城守長知ト(空白)後御家江来」とあり、明記していない。

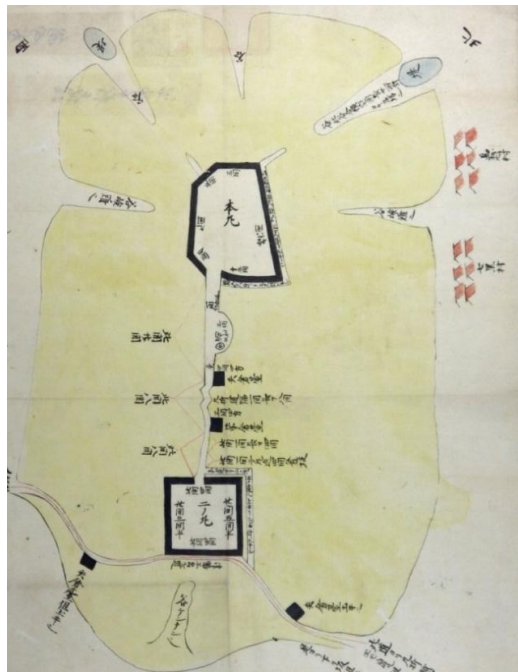
鷹巣城 天正13年2月利家は、前年の加賀・能登での戦いから越中へ攻め始める。2月25日には砺波郡蓮沼を攻め焼き払い引くところ、佐々軍は井波城から佐々平左衛門が駆け付け争いとなるが、この蓮沼攻めにより村井長頼は四千俵加増となる(16.30-2)。翌3月、佐々軍が石川郡の鷹巣城辺りの在家を焼き払う。金沢城から諸将鷹巣へ向かい、引く佐々軍に追い討ちをかける。

倶利伽羅城 天正12年、佐々成政が利家を攻めるにあたり佐々平左衛門・野々村主水を置く。8月の朝日山城の戦いや末森の戦い後の10月、津幡城主前田右近が攻め込んだ龍ヶ峰の戦いなどはこの城から発した佐々平左衛門の軍勢との争いである。なお、翌13年4月守勢となりつつある佐々軍はこの倶利伽羅城を引き払う。替わって利家は近藤善左衛門・岡島喜三郎・原田又右衛門を配し、8月には豊臣秀吉が越中征伐のためここに陣を敷いている。

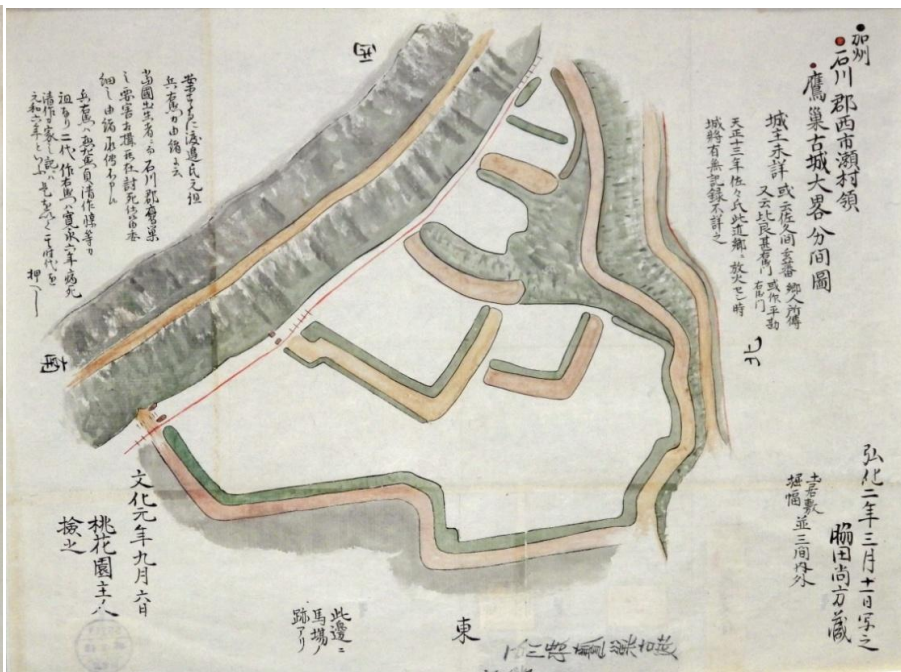
松根城 加賀と越中の境界線上にの山城である。「菅君栄名記」(16.11-10)では、天正12年8月の朝日山の戦いの勢いで松根城を押さえ、原田又右衛門と飯沼勘平を置いたとあるが、「末森記」には記載がない。天正13年4月頃までは成政方の城で、杉山主計や河地才右衛門の名が山城関係の史料に記されている。両者の子孫は後に加賀藩に仕えており、「諸士系譜」では河地隠岐(才右衛門)は「越中荒木・松根両城預」とあり、その子才右衛門が文禄元年(1592)利家に召し出されている。また、杉山小隼太の由緒帳では、九世祖父小助について「越中取出松根ニ在城」とあり、成政切腹後、天正16年利長に召し出されている。



「加賀越中境諸城里程図」(16.51-12)



「加州河北郡鳥越古城図」(16.84-153)



「加州石川郡西市瀬村領鷹巣古城大略分間図」(16.84-148)

○俱利伽羅城址 河村郷
 天正三年佐々成政令其臣佐、平左衛門野々村主水守之
 師兵千餘城又十三年三月城主去此城 古城自廣 此年
 豊臣秀吉師軍征佐々氏成政筑此等于此地拒豊軍
 為此九所云成政軍悉潰 北国太平記
 高德公令近藤善右衛門園島喜三郎原田又右衛門
 平野立郎右衛門守 亡國志 自為領越中之後廢之

「加能城址集覽」(16.84-135)



「加州河北郡松根古城図」
 (16.84-152)

一 九世之祖父
 小即父佐々内亮助方之助也取松根之土城仕其後遷地海國
 山家之城之領其時令一接者南宮取掛由外持信於其内亮助
 上方之助切腹由由水谷登以死天正十六年
 瑞龍院様御名 石上御雲階高十 儀外下 並以此度長十 并御得五百石高
 河地氏
 祖隱岐始計仕佐々成政 一牛石
 改才記天正三成政肥後工得替ノ節宰人日年死イニ文祿四
 年ニ死 共アリ
 才右衛門 文祿元仕 高德公九百石
 才右衛門守常 寶吉田數馬三男
 四百石 利治公江被
 附仕大正寺 御馬廻頭
 才右衛門 足輕頭 慶長十五死
 娶佐々孫右門養女 實助并主水女

「諸士系譜」(16.31-49)

「先祖由緒并一類附帳」
 杉山小隼太 (16.31-65)